



# くすりと健康

一般社団法人  
神戸市薬剤師会

## 薬剤性光線過敏症

光線過敏症は、健康な人では問題のない量の紫外線を浴びた後、皮膚が赤くなる、ブツブツができる、腫れて水ぶくれができる、かゆみが生じるなどの病的な反応が起こることです。このうち、薬によって起こるものは薬剤性光線過敏症と総称され、飲み薬によって起こるものを光線過敏型薬疹と呼び、貼り薬など皮膚に直接使用する薬によって起こるものを薬剤性光接触皮膚炎と呼びます。

まず飲み薬で起こる光線過敏型薬疹ですが、原因となる薬剤が血管などを通って皮膚の中に入り、紫外線の働きで薬と皮膚の蛋白が結合し、それが抗原となって免疫反応を起こし湿疹などの症状が現れます。このため、その反応を起こす薬剤にしかならずに光線過敏型薬疹の症状は現れません。そして、反応を起こしやすい薬

剤もある程度決まっています。ニユーキノロン系抗菌剤、非ステロイド系消炎鎮痛剤、降圧剤、スルホニルウレア系血糖降下剤などの一部の薬です。薬以外でも、クロレラなどの健康食品も光線過敏症の原因になることが知られているので注意が必要です。

薬剤性光接触皮膚炎の原因も飲み薬の場合と同様です。したがって、貼り薬などを使用した後、皮膚の内部に薬剤が残っていると発症します。この場合、貼ったところなど使用部位に紫外線が当たらない場合は、症状が起きず確実に予防できるので、衣服で覆う（なるべく濃い色の方がよい）、衣服で覆えない場合はサンスクリーン剤（光線過敏症を起こすのは紫外線のうちUVAなので、UVA防御指数を表すPA値の高いものが効果的）を塗るなどの紫外線対策が有効です。また、曇りの日や室内でも、紫外線は雲やガラスを透過してきますので注意をする必要があります。反応を起こしやすい薬剤は、飲

み薬の場合と同様にある程度決まっています。代表的なものは、ケトプロフェンなどの消炎鎮痛剤で、貼り薬の場合、貼っているときは貼り薬自体が紫外線を遮るので症状が出ませんが、剥がしたあともしばらくは皮膚の中に薬剤が残っているので、使用后4週間ほどは紫外線対策が必要です。

これから紫外線の照射量が多くなる季節です。光線過敏症は紫外線を浴びないと症状は出ないので、紫外線対策をしっかりおこなって光線過敏症を予防してください。もし、皮膚の露出した部分だけや貼り薬などを使用した部分にだけ湿疹がある場合は、使用した薬を持って早めに皮膚科を受診することをお勧めします。

（北区 薬局エヒラファーマシー

松本 博志）

